

時代区分 I 琉球人が尖閣諸島について地理的認識を有していたことを示す資料

琉球人と尖閣諸島との関わりが窺える系図家譜

琉球の系図家譜

琉球王国の行政機関として1689年に系図座が設置され、系図の編集が本格的に始まった。系図を持つことを許された身分を「系持(けいもち)」(＝士族)、持てない身分を「無系(むけい)」(＝平民)といい、これは身分制度の基礎となった。各家から原稿が系図座に提出されると、担当役人が事実関係を厳しく審査した。審査に合格した原稿には国王の公印が押され、1部は系図座で、1部は各家で保存された。各家で世代交代が起こり、先代の記事を追加する原稿が提出された際にも、同様の手続きがとられた。このように、琉球の系図は私文書としてではなく、公文書として貴重に扱われた。王国時代、沖縄本島の首里・那覇などに約3000冊余が存在したと推定されている。

各系図の表紙には一族の姓、そして本家・分家の別が記される。本文は歴代の系統を記す系図の部分(世系図とも呼ばれる)と、歴代当主の家族とその者の履歴・職歴を記す部分(家譜と呼ばれる)に二大別される。そのため、「系図家譜」が往時の公式名称であった。「系図」または「家譜」というのは、その略称である。

系図家譜は、琉球・沖縄の歴史を研究するうえで、きわめて重要な資料と位置づけられており、この記録を活用して多くの研究論文が発表されている。

No.3 向姓具志川家家譜 十二世諱鴻基

報H28/P9 1819年(推定)

資料概要

琉球王国時代に有力な士族であった向鴻基(今帰仁朝英)(※1)に関する系図家譜(※左記参照)で、翻刻されて『那覇市史資料篇第1巻7』に収録されたものの。現在の尖閣諸島の一部と考えられる「魚根久場島」について言及がある。

1819年(推定)、向鴻基が用務で薩摩(鹿児島)に出張したところ、一行の船(薩摩船)が海上で遭難し、嵐がおさまって島に漂着したことについて記述がある。その島について、「後に聞くところでは俗に魚根久場島と呼ぶなり」と分注(本文の下に小さな文字2行で記載される注釈)が書き加えられている。

この資料の該当部分の記述の中で、一行が、嵐がおさまり漂着した島に停泊し、用水を汲もうとしたが湧水は無かった旨の記載があり、この島に上陸したことが窺われる。

また、一行は、この漂着の後、三日間風が吹くのを待ったが、突然暴風が起こり再度漂流し、与那国島に漂着したことが書かれている。資料には、八重山の奉公人(与那国島の行政を担った地方役人)が島の上から一行の船に合図をしたことが記述されていることから、遭難船の救助に慣れていたことが理解される。

さらに、一行に対して、漂着した島が「魚根久場島」であることを伝えたと推測されることから、この資料は、19世紀初めには、八重山の人々の間で、遭難などの事象を通じて尖閣諸島に対する明確な地理的認識(※2)が持たれていたことを示唆している。

- ※1 向は「しょう」と読み、王族である尚氏と同じ。ただし、「尚」の姓を名乗るのは王を中心とする限られた王族のみで、向姓は広い意味では王族の血筋を引くが、有力士族と解するのが適切。
- ※2 19世紀初めの古い時期に尖閣諸島への上陸について記載した資料は珍しい。また、八重山の人々が尖閣諸島に対する明確な地理的認識を有していたことを示唆している点でも、重要な資料であると考えられる。

作成年月日	1982年(昭和57年)(収録誌)
編著者	-
発行者	-
収録誌	那覇市史資料篇第1巻7(向姓家譜 大宗 諱韶威)
言語	漢文
媒体種別	紙
公開有無	有
所蔵機関	沖縄県立図書館
利用方法	沖縄県立図書館で閲覧を行う

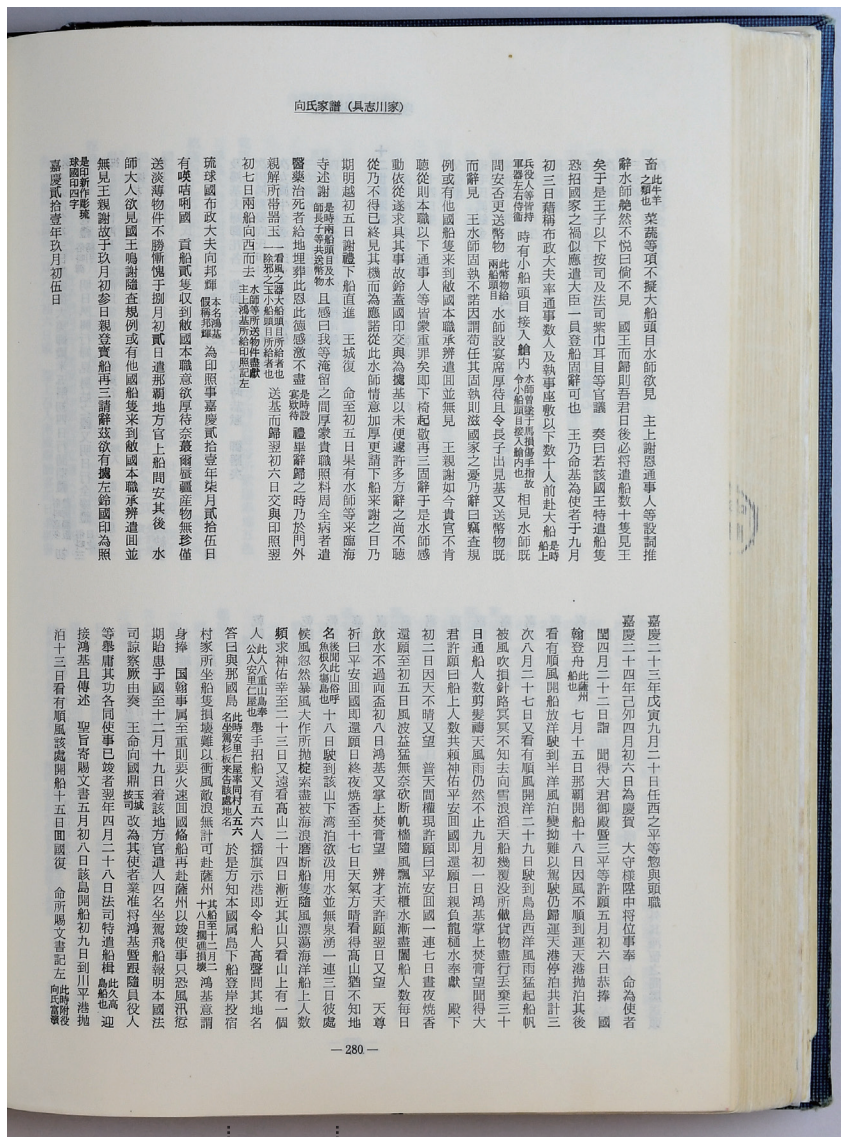
内容見本

具志川家、十二世向鴻基。

「(略)(九月)十七日、天氣方晴、看得高山、猶不知地名(後聞此山、俗呼「魚根久場島」也)。十八日、駛到該山下灣泊、欲汲用水、並無泉湧。一連三日、彼處候風。忽然暴風大作、所拋旋索、盡被海浪磨斷。船隻隨風漂蕩海洋、船上人數頻求神佑。幸至二十三日、又遠看高山、二十四日、漸近其山。只看山上有一個人(此人、八重山島奉公人安里仁屋也)、舉手招船。又有五六人、搖旗示港。即令船人高聲問其地名、答曰「與那國島」(略)。

現代語訳

(1819年陰暦9月)17日に天気がよく晴れ、高い島が見えたが地名が分らなかった(後にこの島は地元で「魚根久場島」と呼ばれると聞いた)。18日、その島の下まで航行して入江に停泊し、用水を汲もうとしたが、湧き水はなかった。三日間連続でその個所で風を待った。突然暴風が激しく起こり、錨も綱も全て波浪によって絶たれた。船は風にまかせて漂流し、船上の人々は幾度も神助を求めた。幸いに23日にまた高い島が見えた。24日、次第にその島に近づいた。島の頂上に一人がいて(この人は八重山島奉公人の安里仁屋である。)、船に手を振った。また5、6人が旗を振って入江を示した。すぐに船員に大声で地名を問わせると、「与那国島」と答えた。



所蔵：沖縄県立図書館

【参考】那覇市史編纂事業における系図家譜の調査研究について

この資料は、『那覇市史資料篇第1巻7』(向姓家譜 大宗 諱韶威)に収録されている。同市史の<解説>(P1)によれば、系図家譜には本島系(首里・那覇・泊、久米)と先島系(宮古・八重山(久米))があり、家譜の総目録である『氏集 首里那覇』では、本島系で約3000冊、姓が約400種あるとされている(先島系は氏集が存在せず冊数不明)。

系図家譜は、囲み解説(P17)にあるように、系図座と各家に保存されていたが、系図座に保存されていたものは戦災により焼失している。那覇市では、昭和

40年代から、各家に保存されている系図家譜の調査、収集(複写)を行い、1981年12月時点で、550冊を収集、その中から選択的に翻刻された形で収録されたものの中に具志川家の家譜も含まれた。

現在、那覇市歴史博物館には約950点(宮古・八重山を含む)の家譜資料があり、このうち『氏集 首里那覇(第5版 増補改訂版)』に収録された家譜は、2008年9月までに約600冊が複写収集され、複製本を所蔵している。

写真上は家譜表紙、下は中面。『那覇市史資料篇第1巻7』より
所蔵：沖縄県立図書館

